

都市におけるアメニティの成立要件とその伝播

津 川 康 雄

Materialization Important Matter and Diffusion of the Amenity in a City

Yasuo TSUGAWA

Summary

In general, amenity often represents better comfort and livability of living environment. Equipments, facilities and hygienic environment provide more comfortable living environment to buildings and lands as well as additional values to building style and surrounding scenery, which can be embraced as urban amenities. Having the broad concept in aspects of urban and social lives, the term of amenity also includes enjoyment in QOL and something adding comfort to social life. Thus, amenity with both of hardware and software aspects has a considerable effect on formation of living environment.

The urban scenery consists of various visual elements and the most prominent element is positioned as the symbol of the city and plays the important role as one of the elements to develop regional characteristics. Most of those symbols are recognized as the landmark and often embraced as an element of the urban amenity regardless of awareness level as eye-catcher.

Backgrounds creating regional symbols artificially (or deliberately) are based on some direct motive or intention or indirect recognition of the subject as a symbol. Many regional symbols create new colors and shapes and add new visual elements to the region directly or indirectly. Most of them support our spatial performances and activities and make the landmarks allowing positional awareness. Thus, a regional symbol or landmark positioned as a center axis of human spatial awareness or activities is recognized as an element developing regional or urban amenities. In addition, a landmark positioned as a favorable amenity is accepted by many people and often diffused to various areas. "Flower clock" introduced on this chapter shows the representative case.

I. 都市景観とランドマーク

(1) 景観とアメニティ

アメニティとは一般に、住環境の快適性や居住性の良さを指すことが多い。都市においては、建物・土地に住環境として快適性を生み出す設備や施設、衛生的環境、住環境に価値を添える建物の様式・周囲の景観などとして捉えることができる。そのスケールも、都市的、社会的に広い概念であり、生活の質に関わる楽しみや、社会生活上の心地よさを与えるものも含まれる¹⁾。このように、アメニティはハードとソフトの両側面を有し、生活環境の形成に多大な影響を及ぼしている。

他方、人間の視覚は景観を捉えるために、色や形、明暗を判断し、各種の景観要素を認知・認識し、その過程で人々は景観要素としての各種ランドマークを空間的特異点として位置づけている。人間は自然環境に順応・適応し、改変するなどして長い歴史の中で社会生活を営んできた。こうした地理的空間における生活の場が成立する中で、さまざまな景観が形成されてきた。景観は自然環境そのものである場合や、自然環境に人文環境が融合する中で成立する場合もある。人間があらゆる意味での空間行動を基本として生きる限り、景観との関係は密接なものとなり、記憶や心理的要因となって個々人の空間イメージや原風景が形作られていく。たとえば、都市のイメージを論じたリンチ (Lynch,K.) は、都市環境のイメージを三つの成分 (identity,structure,meaning) に分け、そのうちのアイデンティティ (identity) とストラクチャー (structure) を用いてアメリカ合衆国の3都市の調査を行った。具体的には、都市のイメージを構成する五つのエレメント (paths,edges,district,nodes,landmarks) を抽出した。そして、視覚的傾向の強い都市のイメージは、個々のランドマークが統合されたものと言っても過言ではないことを指摘している²⁾。

このように、都市の景観は各種の視覚要素から成り立ち、顕著なものは都市のシンボルとして位置づけられ、地域性を育む要素としても重要な役割を果たしている。それらの大半がランドマークとして認識され、アイストップとして認識レベルの違いはあるにせよ、人々の空間行動を支え、都市におけるアメニティの要素として捉えられることも多い。

他方、地域のシンボルが人為 (意図) 的に生み出される背景は、直接的動機や意図に基づくものや、間接的にその対象がシンボリックなものとして認識されるに至ったものなどが存在する。前者は各種のモニュメントや記念碑に代表され、人々の記憶に留めておきたい出来事・事業や人物などの顕彰を目的に生み出されるものが多い。後者は各種の産業遺跡やテクノランドマークなど、本来はその機能を果たすことが優先されたにも関わらず、その後シンボリックな対象として認知され、結果的にその時代を表象する地域のシンボルとして位置づけられるに至ったものなどに代表される。とはいえ、地域のシンボルは直接・間接を問わず、新たな色と形を創出することで当該地域の景観に新たな視覚要素を付加していくことが多い。それらの大半が我々の空間行動や活動を支え、位置関係を明確化可能な対象としてのランドマークになることが多い³⁾。

なお、ランドマークが成立する過程は意図的なものが多いが、時間の経過とともに結果としてランドマーク化されるものもある。ランドマークの成立過程には、地域アイデンティティの形成・醸成とそれを支えた人々の知恵・発想・努力の存在が欠かせない。ランドマークは地域アイデンティティや地域イメージの確立なしに具現化されることはほとんどない。言い換えれば、地域アイデンティティの視覚化に伴って生み出されるランドマークは当該地域住民や多くの人々に共感を持って受け入れられ、人々に違和感なく受け入れられる対象である。すなわち、地域におけるシンボルやランドマークは、人々の空間的認識軸・行動軸に定位される存在であり、それらは、地域や都市のアメニティを育む要素として認識されることも多い。また、良好なアメニティとして位置づけられるランドマークは多くの人々に受け入れられ、様々な地域に伝播（diffusion）することが多い。本稿で取り上げる「花時計」はその代表例と言えよう。

（２）花時計成立の経緯と伝播（diffusion）

a. 花時計の定義と発達

1903（明治36）年、世界で初めて花時計がイギリス・スコットランドのエディンバラで誕生した（写真1-①・②）。これは、絨緞花壇と機械式時計が組み合わされたものであり、エディンバラ市公園局長ジョン・マクハティーの発案と言われる⁴⁾。花時計が生み出された背景には、花の開花時刻の違いに着目し数種類の花の組み合わせによる花時計が考案されていたことや、日時計花壇の発想があった。ガーデニングの文化を育んだイギリスによって庭園内に絨緞花壇が造りだされ、後に日時計花壇が生み出され、それが機械式時計を利用した花時計の成立へと向かっていった。その後、エディンバラの花時計は文字盤の改良や時計・分針の付け替え、動力装置の改良等が行われ現在に至っている。花時計の大きさは、文字盤の直径が3.5mであり、文字盤の周囲及び針の上部を含めて植物が密植されている。そして、文字盤や針の上部を飾る植物が植え替えられる際には、エディンバラで開催されるイベントなどをテーマに植栽されるといった形式が用いられ、花時計のプロトタイプとして位置づけられる。2003年には花時計誕生100周年を迎えた。

このように、エディンバラにおいて生み出された花時計は、都市や地域におけるアメニティを具



写真1-① エディンバラの花時計①



写真1-② エディンバラの花時計②

現化する装置としてのミーニング（意味）が付与されたことに他ならない。それは単に時を知らせる装置としての意味を超え、花や植物の美や季節感を人々に享受させ、空間的特異点としての認識を明確化し、空間認知の役割を担うランドマーク（ランドサイン）として位置づけられる。また、地域イメージや地域アイデンティティを育み、観光対象としても重要な意味を持つことになった。そして、何よりも良好なイメージを保有するランドマーク（ランドサイン）としての花時計は世界各地に伝播（diffusion）することになった。もちろん、エディンバラの花時計に関わった人々や企業との結びつきにより、オーストラリア、ニュージーランド、インド、アフリカといったイギリスとの密接な関係を有する国や地域への直接的な伝播をはじめとして、花時計のイメージが間接的に伝播し、具現化した国や地域といった伝播の違いが存在する。しかし、花時計が都市や地域におけるシンボルとしてアメニティ効果を発揮し、ランドマーク（ランドサイン）として世界各地に伝播したことに変わりはない。

b. エディンバラの都市景観と花時計

エディンバラはスコットランド北東部のフォース湾に面し、人口約45万人の都市である。旧市街と新市街の町並みは、ユネスコの世界遺産に登録されている。この街がスコットランドの首都となったのは1492年のことで、スコットランド議会も同じ年に設立された。1726年に街の名にちなんだグレートブリテン貴族の一つである公爵位エディンバラ公が創設されたことでも知られている。

エディンバラの中心地区は、エディンバラ城が位置する岩山から尾根を下るロイヤル・マイル一帯のオールド・タウン（旧市街）である。ロイヤル・マイルはエディンバラ城から英国王室のスコットランドでの邸宅として使用されるホーリルード宮殿に至る1マイル（約1.6km）の通りであり、オールド・タウンの骨格をなしている（写真2）。18世紀の後半にオールド・タウンの人口増加を解消するために、プリンシズ・ストリート（PRINCES STREET）が設けられ、その北側一帯に長方形の整然とした区画が施されたニュー・タウンが形成された。

エディンバラ城とプリンシズ・ストリートの間にはかつて濠があり、オールド・タウンの防備が目的だったが、1759年にニュー・タウン建設のために排水された。その後、ニュー・タウン建設工事に



写真2 ロイヤル・マイル（エディンバラ）



写真3 エディンバラの市街地
（中央にスコットの記念塔）

よって生じた土砂で埋め立てられ、私有の庭園、そして現在のプリンシズ・ストリート・ガーデン (Princes Street Gardens) となり、市民・観光客の憩うオープンスペースとして利用されている⁵⁾。プリンシズ・ストリート・ガーデンにはスコットランドの愛国心を高めた文豪スコットの記念塔が建てられた (写真3)。

プリンシズ・ストリート・ガーデンはマウンド (The Mound) を挟んで東西に分かれており、西プ



写真4 西プリンシズ・ストリート・ガーデン (右隅の斜面に花時計が設置)

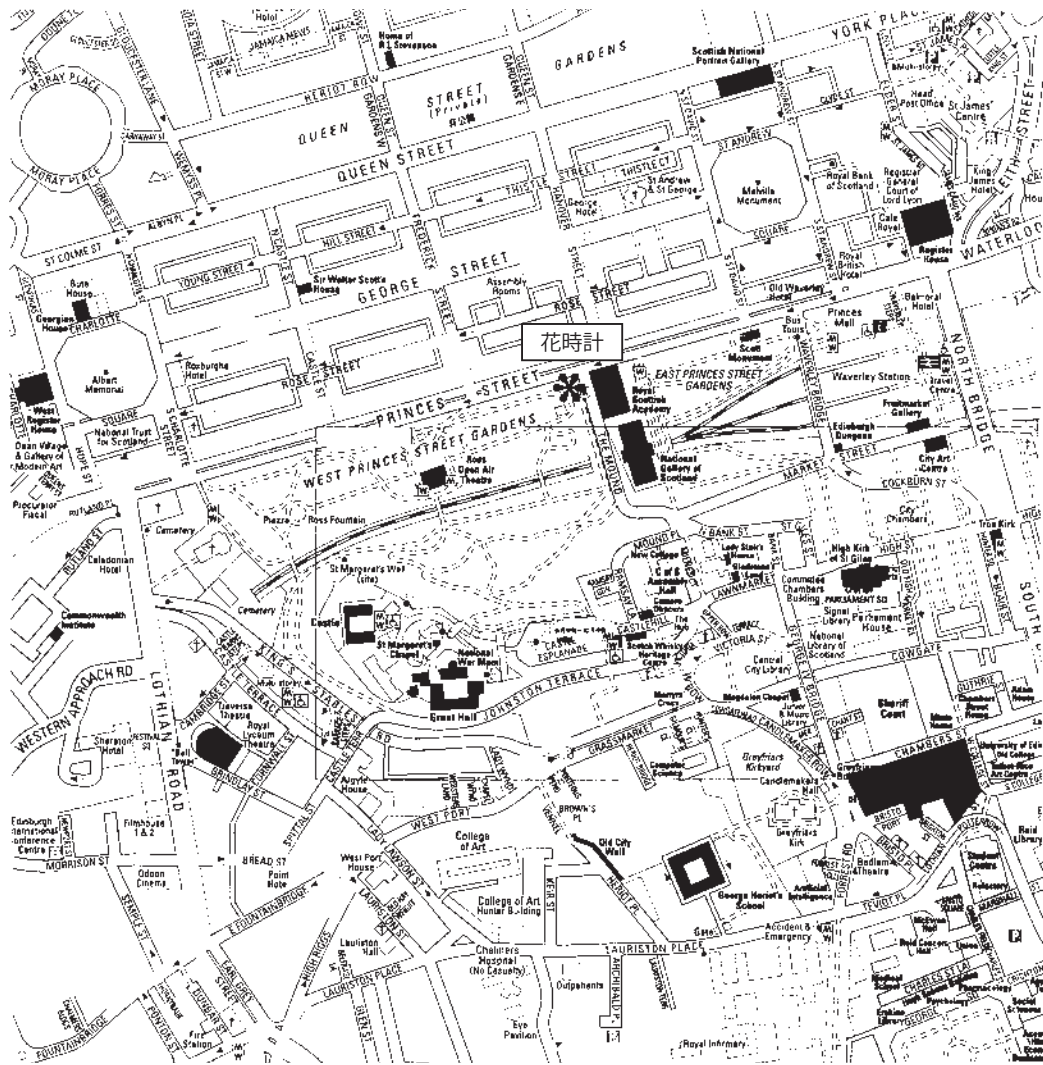


図1 エディンバラの中心部と花時計の位置 (PITKIN GUIDE2005, "Edinburgh", Jarrold Publishing)

リンシイズ・ストリート・ガーデンの一角の斜面に花時計が設けられている（図1）（写真4）。ちなみにマウンドはニュー・タウンの基礎工事から出た土砂や瓦礫からなり、ロイヤル・マイルの尾根地帯とプリンシイズ・ストリートを結ぶために設けられた。マウンドー帯には、現在、王立スコットランド美術館やナショナルギャラリーが立地するなど、エディンバラにおける文化・芸術の拠点となっている。西プリンシイズ・ストリート・ガーデンに設置された花時計は人々の視線を集め、公園のアメニティとして重要なアクセントをもたらし、ランドマーク（ランドサイン）として時を刻んできた。規模こそ小さいが、その後世界各地に伝播・展開した機械式で植栽を伴う花時計のルーツであり、プロトタイプとしてその存在価値は高い。

II. ジュネーヴの都市景観とランドマーク

（1）ジュネーヴの概観

スイスのジュネーヴは同国の南西部に位置し、人口は約18万人でフランス国境近くに位置するためフランス語圏に属し、ジュネーヴ州の州都となっている。第二次世界大戦前には国際連盟の本部が置かれ、現在でも、国際連合の諸機関等の国際機関が多く存在する国際都市として機能しており、条約の作成やさまざまな国際会議が行われている。国際連合諸機関として、国際連合欧州本部（Palais des Nations）が置かれ、国際連合貿易開発会議（UNCTAD）、国際連合専門機関として国際労働機関（ILO）、世界保健機関（WHO）、国際電気通信連合（ITU）、その他の国際機関として世界貿易機関（WTO）、赤十字国際委員会（ICRC）などが活動の拠点としている。ジュネーヴ及びその一帯は時計工業が発達している。スイスの時計工業の起源は、ジュネーヴの金銀細工師の技術と宗教迫害によってフランスからジュネーヴへ逃れてきた時計師の技術によりもたらされ、16世紀後半に時計工業の成立へと結びついたとされる。その後、スイスの時計工業は自動機の使用によって大量生産するアメリカ合衆国や日本との競争に晒されながらも、高級化やデザインへの特化などにより、現在もなお時計生産国としてその地位を保っている。

市街地はレマン湖の湖岸や湖脚一帯に展開し、周囲をサレーヴ山（Mont Saleve）、ジュラ山脈等の山地に囲まれ、市内をアルヴ川、ローヌ川が流れている。近世にはプロテスタントの一派である改革派の拠点となり、ジャン・カルヴァンらによって宗教改革の中心地となり、共和政治が行われた。また、ジャン＝ジャック・ルソーはこの街の出身として名高い。

（2）都市空間の形成とランドマーク

ジュネーヴにおける市街地の形成とその構造は、大きくレマン湖及びローヌ川を挟んで北西部が新市街地で、南岸及びローヌ川の左岸一帯がオールド・タウンとなっている。ローヌ川北側にはコルナヴァン駅（Gare de Cornavin）があり、フランスのTGVが乗り入れるなど交通拠点となっている。国際連合欧州本部など国際機関の大半もこの一帯に点在している。両市街地はモンブラン

橋（Pont du Mont-Blanc）などの橋で結ばれ、ジャン＝ジャック・ルソーの銅像のあるルソー島も人工的に造られた。ルソー島にはベルグ橋（Pont des Bergues）から渡ることができる。旧市街地にはカルヴァンに代表される宗教改革記念碑（写真5）、ジュネーヴ大学、赤十字協定や様々な国際協定締結の舞台となった市庁舎が点在し、ひととき高くカルヴァンゆかりのサン・ピエール大聖堂がそびえ立っている。サン・ピエール大聖堂は12～13世紀にかけて建築され、ロマネスク様式とゴシック様式が混在している。当初はカトリックの教会であったが、カルヴァンの影響によりプロテスタントの教会となった。

かつて湖岸には湖からの外敵の侵入を防ぎ、街を守るための要塞が設けられていた。後に要塞部分は取り壊され、1854年にイギリス公園（Jardin Anglais）の一部が造られた。そして、1862年からジュネーヴのシンボルともなるモンブラン橋の建設が開始され、新市街地と旧要塞部分が結ばれるとともにイギリス公園も拡大された（写真6）。また、レマン湖の南岸に湖岸に沿って遊歩道（Promenade du Lac）が設けられ、広大で快適な公園整備が進み、市民・観光客にとっての憩いの空間が成立した。現在、この一帯には1862年に作られた銅製の噴水、1814年にジュネーヴがスイス連邦に加わったことを記念して1869年に作られた立像（Monument National）、野外音楽堂、そして1955年に作られた花時計が点在している。レマン湖の湖岸には観光客や外交官・ビジネスマン向けのホテルが林立し、観光船の発着場やヨットやクルーザーの波止場が数多くあることからリゾート地の景観を呈している（図2）。

なお、1886年にジュネーヴのシンボルでありランドマークとなる大噴水（Jet d'Eau）が造られた。当初は約30mの高さまで水が噴き上げられる形式だった。1891年にその価値が再認識され、約90mの高さの噴水が現在の位置に造られた。これほど大きな噴水によって大量の水を高く噴き上げるためには、高性能のポンプや発電機が必要であり、スイス及びジュネーヴの技術力の高さを



写真5 宗教改革記念碑



写真6 モンブラン橋



写真7 大噴水（Jet d'Eau）

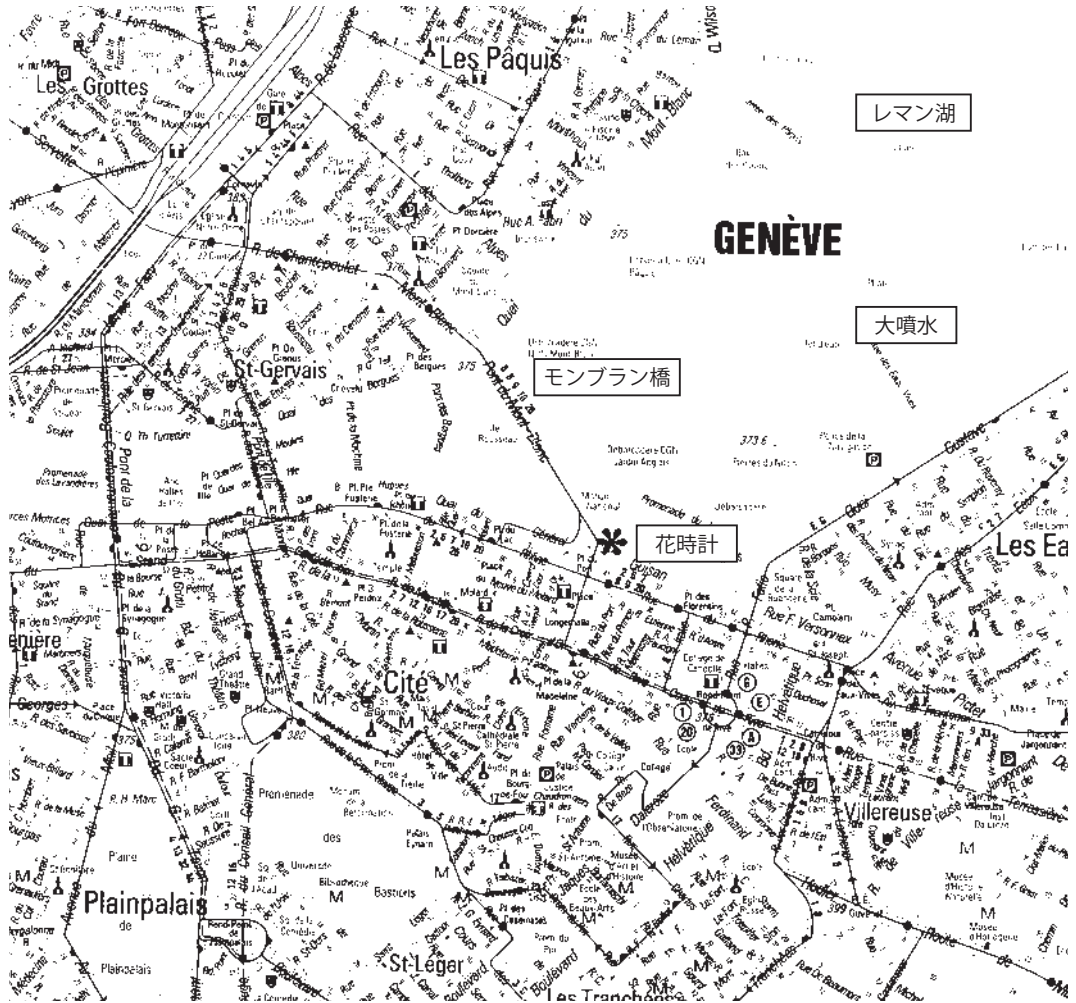


図2 ジュネーブの中心部と花時計の位置 「City map of Geneve」(Edition MPA)

象徴するものともなっている。現在の噴水は1994年に造られたもので高さ140mにまで水が噴き上げられ、市内各所からその姿を眺めることができる。噴水は夜間にライトアップされるなど、ジュネーブを象徴するランドマークとなっている（写真7）。

（3）都市のアメニティと花時計

ジュネーブの花時計（L'horloge-fleurie）は1955年にイギリス公園の南西部分に据え付けられた。その理由の一つは、ジュネーブが世界的な時計生産を行っていることを人々の記憶にとどめてもらうためであり、公園内の花壇の配列にアクセントを設けるといった意図があった。時計の秒針は2.5mの長さで1秒間に27cm動き、円周は15.7mとなっている。花時計には植え替え時、6,300種の異なる植物によって飾られる。花時計の維持・管理はジュネーブ観光事務所（Geneve Tourist

Office) が主導し、財政的にはジュネーブ州とヴォー州の時計業組合 (Watchmakers Union) によって行われている (写真 8-①・②)。その位置はモンブラン橋 (Pont du Mont-Blanc) を通過する道路とギザン通り (Guisan) が屈曲する地点であった。しかし、1992 年に観光客等が写真を撮る際の危険を回避するため、若干後ろへと位置が変更された。

このように、ジュネーブの花時計はスイスやジュネーブの時計工業の技術力と都市のアメニティとしての花時計、そして何らかの要因となったであろうイギリス公園との関連といったことが成立の背景となっている。そして、ジュネーブにおける花時計が都市のイメージやアイデンティティとアメニティなどを具現化し、ミーニングを有するものとして位置づけられた都市の代表例となったのである。その影響は種々の形となって現れ、世界各地へと伝播していった。それは、ジュネーブが国際都市として機能していることと無縁ではない。国際都市として多く

の外交官や使節団が訪れるジュネーブは、他国の都市に多くの影響を及ぼした。その一つに大噴水を挙げるができる。都市のシンボルとして湖岸に広がる都市 (天津市など) にその伝播例を見出すことができる。さらに、花時計もその例として位置づけることができる。とくに、日本への花時計伝播に直接的な影響を及ぼした。それは神戸市の元市長によるジュネーブ訪問時の体験・記憶によってもたらされたのである。ジュネーブを訪れる人々は、何らかの形でレマン湖、大噴水、花時計を記憶に留めていく。その記憶や情報が他の国や地域そして都市に伝わり、新たな形で開花する。その伝播 (diffusion) がアメニティを伴うランドマークにとって重要な成立要件となる。



写真 8-① 花時計
(2007 年 津川清一氏撮影)



写真 8-② 花時計 (1986 年)

Ⅲ. 花時計の伝播と都市景観

(1) 日本の花時計

日本における花時計は 1957 年の神戸市において誕生した (写真 9-①・②)。その後、日本の都市や各地の施設等に多くの花時計が造られた。その数は数百を数えることが調査によって明らかになっている (前掲 4)。それは、美観やアメニティを高め季節感を創出できる花壇としての役割と、時を知らせ、アイストップ、ランドマーク (ランドサイン) としての実用性を併せ持つ存在であることが背景となっている。

花時計の設置場所は、公園、区市庁等、鉄道駅（駅前広場等）、市民会館等、学校、遊園地、道路などとなっている。なかでも都市公園に設置される花時計が多い。また、花をテーマに各地に設けられたフラワーパークやフラワーセンターといった場所にシンボルとして設置されるものも多々認められ、ガーデニングとの関係も見出すことができる。憩いや癒しの場としての公園に花時計が設置されることは、花時計の持つアメニティ効果の高さを証明するものとも言えよう。区市庁等に花時計が設置されることも多い（写真 10）。地域や都市の行政中心として機能する区市庁舎は地域住民が集う場でもあり、アイストップとしての花時計を設置することは、和みの効果をもたらしている。鉄道駅（駅前広場）に花時計が設置されることも多い。鉄道駅は人々の結節性・交流性が促される場であり、列車の発着時間の正確さが求められる場でもある。そこに設置される花時計はランドマークとして、あらゆる意味（meaning）が包含されたものと考えられる。すなわち、象徴性・記号性・場所性・視認性等を具現化する対象として、人々に受け入れられるものと考えられる。同様に、市民会館等や学校における花時計も対象者は限定されるものの、様々な効果を発揮し、地域住民や児童・生徒・学生にとってのアイデンティティ醸成に役立つものとも言えよう。遊園地に設置された花時計はアメニティの機能を中心に、ランドマークの特性が生かされたものが多い。それは、来園者にとって撮影ポイントであり、集合・待ち合わせといった機能を兼ね備えたものに他ならない。道路やその周辺に設置される花時計も多く確認できる。高速道路のサービスエリアや道の駅など、鉄道駅と同様の意味を見出すことができる。ちなみに、北海道釧路市の花時計（幣舞公園）は1980年に「緑いっぱい市民運動」の10周年を記念し市民の寄付金をもとに設置されたもので、幣舞橋方面からのアイストップの機能を果たしている（写真 11、図3）。

このように、日本で初めて神戸市に花時計が設置されてから約50年が経過し、日本各地にその姿を確認することができる。設置形態・主体や設置場所は異なるものの、人々に違和感なく受け入



写真9-① 神戸の花時計



写真9-② 花時計の図案（2006年）



写真10 金沢市役所の花時計

られている。設置当初は針が折れたり、植栽が持ち去られるといったモラルを問う声も多かったことも事実である。また、花時計の設置後、さまざまな理由で取り外されるものもあったが、現在では地域や都市の景観要素やアメニティとして機能している。



写真 11 釧路の花時計

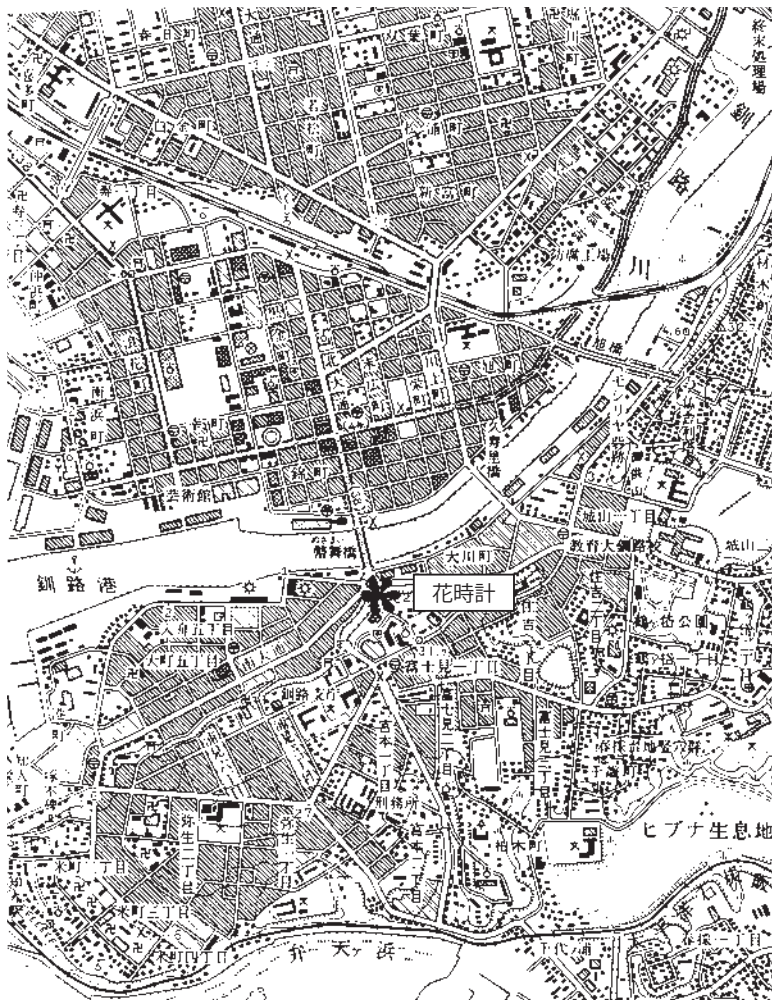


図 3 釧路の中心部と花時計の位置

(2) 神戸市と花時計

先にも述べたように、日本の花時計第1号は1957年に神戸市市庁舎北側広場に設置されたもので、市庁舎落成記念式典に合わせてつくられた。その後1976年に改装され、文字盤の大きさは6m、高さ2.25mで地下に機械室があり、盛土の上に設置されている。花時計の盤面及びその周りには季節の草花が植栽されている(写真9-①)。

神戸市の花時計設置の構想は、神戸市の助役であった宮崎辰雄(その後市長)がスイスのジュネーヴを視察した際に、イギリス公園の花時計を見学したことがきっかけとなった。花時計の製作にあたっては、ジュネーヴの花時計の設計図を取り寄せ、時計メーカーや大学関係の協力を仰いだ。屋外に設置される花時計の設計には、防水・植栽など多くの技術的課題があった。また、インシャルコストやランニングコストなど費用面での苦労もあり、高価な景観施設を公費により設置する是非も問われたと記録されている⁶⁾。そこで、神戸市は広く市民の協力を仰ぐことが計画の実現に必要な不可欠であるとの認識で各界への働きかけを行った結果、神戸フラワーソサエティが全面的に協力し、その他の機関や個人からも多くの資金を提供された。形としては、神戸フラワーソサエティをはじめとする市民有志から神戸市に寄贈される形がとられた。

花時計のデザインは時代とともに変化し、テーマ性を表現するものやシンボルマーク、イベントや行事をテーマとしたものが多く選ばれている。具体的には、神戸・シアトル姉妹都市(1957年)、神戸市制70周年(1959年)、神戸開港百年祭り(1966年)といった形で植栽され、イベントや行事の効果を高めている。花時計のデザインは公募によって決定されることもあり、多くの人々を巻き込むことで花時計の認知度が高められている。現在では、インターネットのホームページ上で現在の植栽・時間などが公開されている(写真9-②)。

このように、神戸市に設置された花時計は日本における先駆的なものとして位置づけられ、日本各地に設置されていく花時計の先駆けとなった。そこには、ジュネーヴの花時計の伝播が見い出されること、多くのソフト・ハードの課題を克服するなかで日本各地に設置されていく契機となったことなどその意義は大きい。現在、日本の花時計は各種事業のモニュメントとしてつくられる例が多く、駅前や公共施設、公園、遊園地など衆目を集めやすい場所に設置されている。

神戸市に設置された花時計はさらなる効果を発揮した。神戸市はアメリカ合衆国のシアトルと姉妹都市交流を行っている。シアトルから神戸市に対してこれまで、姉妹都市提携を記念して「トーテムポール」が、その他「友情の泉」と名付けられた水飲み場など、市民相互の友好を象徴する物が贈られている。その設置場所が花時計のある広場となっている。すなわち、花時計広場は多くの、そして深いミーティングを保有し、国際交流をも確認できる「場」とし



写真12 フラワーロードの標識と花時計公園

て認識されることになった(写真12)。それは、2001年に開業した神戸地下鉄湾岸線(新長田～三宮・花時計前)の駅として「三宮・花時計前」が設けられたことにも示されている(図4)。

神戸市には港に関連するランドマーク(ランドサイン)が多い。それは、明治期の近代的築港事業以来、港の景観や機能と人々の生活を密接に関連させ、地域アイデンティティを醸成させてきたことに他ならない。そして、神戸市街地の背後の錨山、市章山、堂徳山にそれぞれ、錨山電飾、市章山電飾、堂徳山電飾といった夜間に発光するランドマーク(ランドサイン)を生み出してきた。神戸の花時計は港に直接関連するランドマーク(ランドサイン)ではないが、都市の美観を象徴す



図4 神戸の中心部と花時計の位置

るランドマーク（ランドサイン）であり、国際交流を確認できる場であり、都市のアメニティを象徴する存在として位置づけられる。ジュネーブにおける花時計のイメージが伝播し、神戸において具現化する過程はランドマーク（ランドサイン）のもつ象徴性・記号性・場所性・視認性が反映されたものとしてとらえることができる。

（3）品川区とジュネーブの関係

ジュネーブの花時計との結びつきや伝播は東京の品川区においても確認できる。品川区は1991年にジュネーブ市と「友好憲章」に調印し友好都市提携を結んだ。その経緯は、パリ万国博覧会（1867年）とウィーン万国博覧会（1871年）に南品川の品川寺ほんせんじの梵鐘が出展されたが、その後、行方不明になったことに端を発する。その梵鐘は1919年にジュネーブ市のアリアナ美術館で発見され、1930年にジュネーブ市の好意により品川寺に返還された。地元では「洋行帰りの鐘」として親しまれている⁷⁾（写真13-①・②）（図5）。

1990年に品川寺は梵鐘の返還60周年を祝いジュネーブ市への御礼として実物大の梵鐘の複製を造り、併せて品川区とジュネーブ市の交流を促したのである。1991年9月にアリアナ美術館での新梵鐘落成式への出席と友好都市提携のため、品川区公式代表団がジュネーブ市を訪問し「友好憲章」調印の運びとなった⁸⁾。ちなみに、アリアナ美術館は世界中の陶磁器やガラス工芸品の展示で知られている。その後、友好都市提携を通じて市民レベルの交流、ホームステイの受け入れ、ジュネーブ市から「Avenue de la Paix（平和通り）」の標識が贈られ、品川区もジュネーブ平和通りの標識を併せて表示するなど相互の交流が図られている（写真14）。友好都市締結時、品川区はアメリカ合衆国のポートランド、中国のハルビン、ニュージーランドのオークランド市マウントロススキル区と姉妹都市提携を結んでいたが、ジュネーブ市が外国の都市と友好都市の調



写真13-① 品川寺の門



写真13-② 品川寺の梵鐘



写真14 ジュネーブ平和通りの標識 (Avenue de la Paix)

印をしたことはなく、品川区との提携が初めてだった。

花時計の伝播は2002年にJ Tの跡地が品川シーサイドフォレストとして整備され、りんかい線の開通とともに、品川シーサイド駅が設けられた際に確認できる。すなわち、駅前の広場（ジュネーヴフォレスト）にジュネーヴ市から寄贈された花時計（品川ジュネーヴ友好の花時計）が設置されたのである（写真15）。そこには、ジュネーヴと品川との梵鐘



写真15 花時計
(品川シーサイドフォレスト)

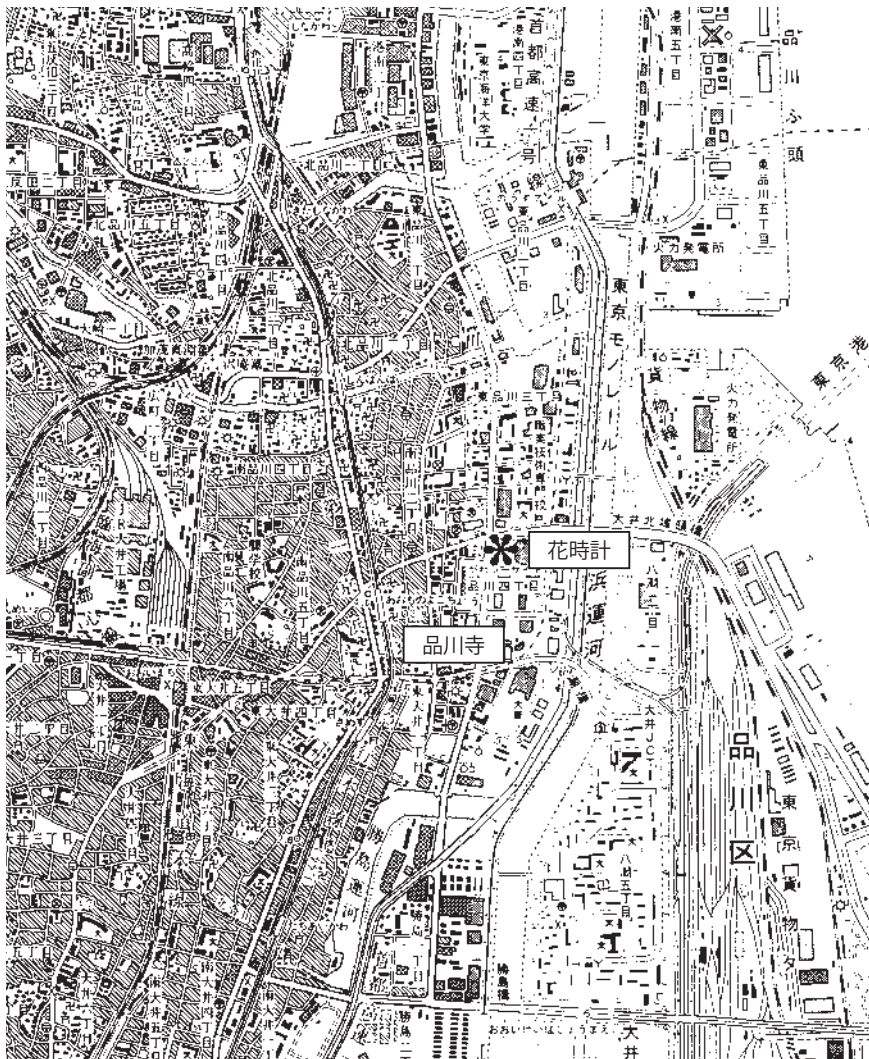


図5 品川（品川寺と花時計の位置）

が取り持った歴史的縁と結びつきが根底にあり、アメニティを促す花時計が両者の橋渡しとなった意味を見いだすことができる。

IV. 都市景観のアメニティとランドマーク

以上のように、都市景観におけるランドマークの機能は多岐にわたり、アイストップ、ビューポイント、空間的アクセントとして都市のイメージを醸成し、アメニティ効果を高めている。イギリス・スコットランドのエディンバラで誕生した花時計は、世界各地に伝播 (diffusion) した。当初の絨緞花壇と機械式時計の組み合わせといった発想が、やがて都市や地域に欠かすことのできないアメニティの装置として、確固たる地位を獲得し景観形成の役割を担っていった。ジュネーヴの花時計は公園の装飾と時計工業のシンボル化・視覚化を前提に造られたが、ジュネーヴのもつ都市のポテンシャルが観光客や外交官・ビジネスマンを通じて発揮されたものとして位置づけることができる。すなわち、良好な景観要素は都市や地域のアメニティを高める効果があり、伝播力を内在しているものと言えよう。花時計はその例であり、明確なランドマーク (ランドサイン) へと昇華するものとして位置づけることができる。日本で最初に花時計が設置された神戸においては、花時計のもつアメニティ効果に加え、人々の空間認知を支える場所性を獲得したのである (図6)。世界の

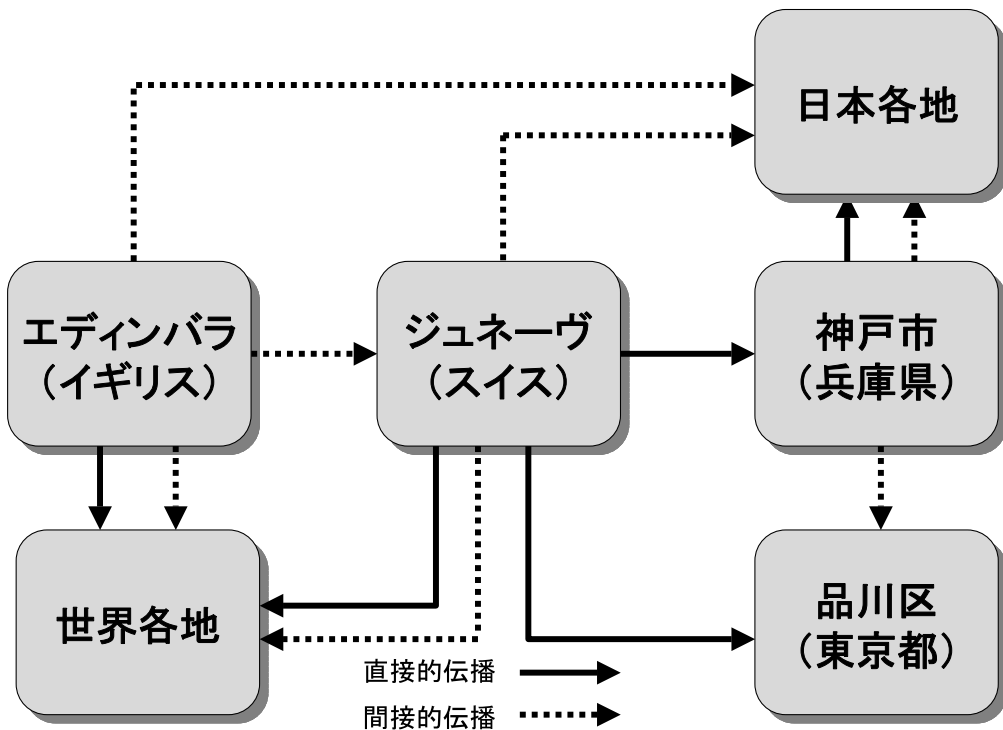


図6 花時計の伝播 (diffusion)

地域や都市に造られた花時計それぞれに生み出された背景が異なり、明確なミーニング meaning(意味) に支えられている。

このように、ランドマーク (サイン) として認識されたものは、ミーニングに支えられ、レジビリティやアメニティを高める対象として位置づけられる。そして、歴史的慣性・地理的特性に育まれ、より強い地域イメージ、地域アイデンティティを内包するものへと転換されていく。都市景観にとってランドマークの果たす役割は大きい。それは単にレジビリティやアメニティを高めると同時に、ミーニングを包含した存在であることに帰結する。言い換えれば、都市景観の醸成にランドマークが欠かすことのできない存在であり、象徴性・記号性・場所性・認知性などの諸特性を保有するランドマークを、人間の空間行動を視覚的・精神的に支え、人々の生活や感性を育む対象として育てていく必要性があろう。

(つがわ やすお・高崎経済大学地域政策学部教授)

<引用・参考文献>

- 1) 日本建築学会 編 1996、『建築・都市計画のための 空間学事典』、井上書院
- 2) リンチ (丹下健三・富田玲子 訳) 『都市のイメージ』岩波書店、1968、1-113 頁。
- 3) 津川康雄 『地域とランドマーク』古今書院、2003、全 225 頁。
- 4) 矢木勉 『日本の花時計』山と溪谷社、2001、全 112 頁。
- 5) PITKIN GUIDE2005、"Edinburgh", Jarrold Publishing
- 6) (財) 神戸市公園緑化協会 『花時計』、神戸新聞出版センター、1985、全 107 頁。
- 7) 品川区教育委員会 『のびゆく品川』2001
- 8) 品川区 『しながわ 1025 号』1991

付記) この研究をまとめるにあたり、平成 20 年度高崎経済大学特別研究奨励金『地域におけるランドマーク及びランドサインの地理学的研究 (研究代表者 津川康雄)』の一部を使用した。本稿中の写真は、写真 8-①を除いて筆者の撮影による。なお、本文中の図 3・4・5 は、原図として国土地理院の地形図 (1:25000) を使用した。